

## 第 37 回 甲南英文学会研究発表会・講演会レジュメ

研究発表 14:00~16:00

【 英語学部門 】 Zoom <https://us02web.zoom.us/j/85041447940>

ミーティングID: 850 4144 7940

パスコード: 584477

1 司会：青木奈律乃（甲南大学非常勤講師）

Experimental psycholinguistics in processing coordinated structure:  
Ambiguity resolution in the case of a pair, Some × others

泉本健太（甲南大学大学院）

Reading a sentence such as, Pete kissed Marie and her sister laughed, for example, readers prefer to process the AND-NP, (and her sister), as the object of the verb kissed. According to Frazier (1987), this preference is explained by the principle of Minimal Attachment, which states: “Attach each items into the current phrase marker postulating only as many syntactic phrase nodes as is required by the grammar.” This principle is purely syntactic: it takes no account of other (lexical, intonational) information. Application of the principle means that, when that sentence is read, readers experience a Garden Path effect: when readers take the NP-coordination reading as the default reading, this results in in the wrong analysis of the structure of such sentences. To my knowledge, there has been only a few studies investigating the processing of coordinate structures. One study done by Howks et al. (2002) examines the coordination reading. In that study, thematic information was manipulated in sentences as a factor in determining reading preference (NP coordination reading or S coordination reading). The researchers found that although thematic information contributes to the reduction of garden-path effects, it does not lead to the complete elimination of these effects. This is consistent with Minimal Attachment

principle. However, no study so far has investigated the role played by determiner type (e.g., some vs. others) in influencing NP- vs. S-coordinated readings. In the present study, I examine the interaction between attachment preferences and determiner choice: i.e., whether the choice of determiner might eliminate the garden path effect in coordinated structures. The prediction is that determiner choice can indeed eliminate NP-coordination reading, resulting in faster reading times, comparable to non-ambiguous sentences. (Specifically, in the second verb or spillover region, reading time will be equivalent to or faster than non-ambiguous sentences.)

2

司会：Andrew Martin (甲南大学)

弁別素性の役割と重要性について

—英語の屈折変化と OCP 原則の関わりから—

西原哲雄 (藍野大学) [t-nishihara@ot-u.aino.ac.jp](mailto:t-nishihara@ot-u.aino.ac.jp)

本発表では、Chomsky and Halle(1968)に基づく生成音韻理論(Generative Phonology)や Sagey(1990)などによる、弁別素性理論(Distinctive Theory)などの音韻理論における重要な概念、要素となっている弁別素性(distinctive feature)の適格性を Leben(1973)で指摘され同一形態素内での同じ音調パターンの連続(後には適用領域は拡大解釈された)を禁止した制約である OCP 原則の関わりからの観点から、失語症患者発話のパターンや、英語の屈折接辞の生起状況に基づき、論証するものである。

日本語話者の失語症患者の発話では、笹沼(1978)などで示された、その逸脱のパターンが弁別素性の値によるものでかつ、誤りである音素と正常な発音との弁別素性の相違は、1つまたは2つであり、4つの弁別素性の値の相違で引き起こされる例はおおよそあり得ないことから弁別素性の存在・機能していることの妥当性を明確に提示する。

そのうえで、英語の複数を示す語尾変化の連続生起(繰り返し性)について Borowsky (1987)では、manner node の弁別素性である継続性素性[continuant]などや primary node である舌頂性素性[coronal]と OCP 原則の関係での説明が適切であり、secondary node である前方性素性[anterior]と OCP 原則の関係で

の説明は適切でない」と指摘している。

しかしながら、Lombardi(1990)では、継続性素性[continuant]などでは、pathsのような複数形の屈折接辞付加に、OCP 原則により誤った母音挿入を誘導し、的確に事実を説明できないことを提示した事から、manner node の1つである弁別素性の粗擦性素性[strident]と OCP 原則による説明が適切と考え、本発表でも、この枠組みを援用する。

そこで、通常の派生接辞ではその生起の連続性が認められるが、屈折接辞の生起の連続性が阻止される現象を語と屈折接辞との OCP 原則の適用で説明が可能である（例えば、\*boys's → boys'のような複数接辞と属格接辞の例）という事を確認したうえで、このレベルでの分析が不十分であることを以下に指摘する。

Mohanan (2003)で示されたような英語では特殊な語尾変化(二重複数)を持った単語の例である、childrens (child +ren+s)は粗擦性素性[strident]の弁別素性と OCP 原則を援用することで、childrens の例での複数屈折接辞と属格接辞の連続の適格性と、通常の屈折接辞連続の不適格性(\*boys's → boys')を区別して、屈折接辞の連続性を認めないという制約が、語レベルと接辞レベルではなく、弁別素性のレベルであることを、明確に論証するものである。

[英米文学・文化] Zoom <https://us02web.zoom.us/j/88930050023>

ミーティングID: 889 3005 0023

パスコード: 438749

1

司会: 杉浦裕子 (甲南大学)

イギリス小説における乳母の表象

市川亜矢子 (甲南大学大学院)

イギリスの小説において、「乳母」が登場する作品は数多く存在する。その有名な例として、『メアリー・ポピンズ』(Mary Poppins, 1934) や『マチルダばあやといたずらきょうだい』(Nurse Matilda, 1964) といった作品が挙げられる。この二作品は、どちらも子供たちが乳母とともに過ごし、触れ合うことで成長していく物語であり、子供と乳母の関係性がよく読み取れる作品である。多くの人が「乳母」と聞いて思い浮かべるイメージも、彼女たちのような不思議な魅力を持

った乳母ではないだろうか。しかし、この二作品は乳母が Nanny と呼ばれるようになってから誕生したものである。イギリスでは、1920 年頃から「乳母」のことを Nanny と呼ぶようになったと言われており、それ以前は授乳をしない乳母を Dry nurse、授乳やおしめをかえる乳母を Wet nurse と、乳母の仕事内容によって呼び分けていた。Nanny と呼ばれる以前の乳母たちも、主人公の子供と強い絆で結ばれていたり、唯一本音をさらけ出せる相手として描かれているが、母性を感じさせる存在として描かれることが多いように感じる。実の両親以上に、子供たちにとって近い存在であった乳母たちは、品行方正な人物であることを望まれ、子供に無条件で母性を与えることを求められていた。しかし、それと同時に、女性の身体的特徴を利用し賃金を得ることから、娼婦と同様のイメージを背負わされることもあった。こうした乳母に持たれたイメージには矛盾があり、小説の中に出てくる子供たちの味方といった乳母の姿からは想像できないものである。そして、そういった母性溢れる乳母というイメージが生まれたのは、ヴィクトリア朝時代に女性に求められた「家庭の天使」像が、少なからず関係しているのではないかと考える。また、Nanny と呼ばれた乳母たちには、そういったイメージが定着していないことも興味深い点である。例えば、『メアリー・ポピンズ』を読んでも、子供たちは彼女のことを母親の代わり、母性を感じる相手としては考えていないように感じる。同じ「乳母」という職業だとしても、時代と人々の持つイメージが変わったことにより、まったく違う描かれ方をしているのである。

そこで、本発表では、前半にチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812~1870) の『デイヴィッド・コパフィールド』(David Copperfield, 1850)、ジョージ・ムーア (George Moore, 1852~1933) の『エスター・ウォーターズ』(Esther Waters, 1894) の二作品を取り上げ、ヴィクトリア朝時代に Dry nurse、Wet nurse と呼ばれた乳母たちと子供たちの関係性や、彼女たちがどういった理想像を投影されたのか、乳母でありながら母親でもあった女性がどういった立場に置かれていたかを見ていく。後半では、Nanny と呼ばれるようになった乳母に焦点を当て、それ以前の乳母とのイメージの違いおよび、主人公としての Nanny の描かれ方を見ていく。

## レディ・ブルトンから考えるウルフ像

梅田杏奈（神戸大学大学院）

作家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）と精神病。これはウルフに関する研究の中でも、様々な議論がなされてきた問題のひとつである。これまで文学的な研究に限らず、精神医学や心理学といった方面からの研究も数多くなされている。確かに、ウルフ自身「神経衰弱」と診断されたこともあり、自殺未遂も 1904 年と 1913 年の 2 度にわたって繰り返している。しかし、こういった事実がある一方で、彼女が執筆した作品どれをとっても特に際立って異常な様子は見当たらない。このような点から、ウルフの伝記を執筆したロジャー・プール（Roger Pool）をはじめ、彼女の狂気が医師たちの陰謀だと指摘する批評家もいる。はたして彼女は狂気患者なのか、それとも医師たちによる抑圧の犠牲者なのか。医師とウルフとの間に見られる駆け引きをふまえて考えていく。

ウルフの医師嫌いはよく取り上げられ、特に『ダロウェイ夫人』（*Mrs Dalloway*, 1925）に登場する精神科医サー・ウィリアム・ブラッドショー（Sir William Bradshaw）が批判の対象となる。彼は患者を理解せず、自殺に追い込む悪徳医師として描かれている。しかし、医師に対する怒りのはけ口として、このような人物を仕立て上げ、批判する点にはむしろウルフの強かさや大胆さすら感じられる。このブラッドショーのモデルのひとりとされている人物がジョージ・ヘンリー・サヴェッジ（George Henry Savage）であり、彼は 1904 年から 13 年までの自殺未遂に挟まれた約 9 年にわたってウルフの主治医を努めた医師である。ウルフに精神病の兆候を見だし、「神経衰弱」を患っているとして療養所送りにしたうえ、「安静療法」（Rest Cure）と呼ばれる強制的な治療を施したことで、権威的や家父長的な医師として取り上げられるが、注意深く見てみると、サヴェッジ医師の主張やウルフへの対応にはいくつかの矛盾が見られる。本発表では、ウルフに同情して医師を批判する立場をとるのではなく、また、「家父長制の被害者」や「医師たちによる抑圧の犠牲者」といった弱者としてウルフを捉えることもしない。あくまでもサヴェッジ医師の論文や著書を中心に分析を行い、歴史的背景も含め、狂気の増加、女子教育と遺伝といった観点から彼の矛盾を暴く。そして、サヴェッジ医師とウルフのふたりの関係に見られる矛盾から、『ダロウェイ夫人』に描かれた狂気と権力の関係についても分析を行う。

## 講演会

Zoom <https://us02web.zoom.us/j/88930050023>

ミーティング ID: 889 3005 0023

パスコード: 438749

司会: 中井誠一 (島根大学)

「ジェームズが、もし詩を書いたとしたら 。。 Henry James, Cid Corman, Donald Justice をめぐって」

別府恵子 (神戸女学院大学名誉教授、松山東雲女子大学名誉教授)

### [要旨]

ジェームズ没後百年記念国際学会(2016)の開催は、私にとって文学作品におけるジャンル横断現象をあらためて考える機会となった。小説作家が小説以外のジャンル、詩、戯曲、評論や書評を手掛ける。メルヴィルには *Battle Pieces* や *Clarel* など詩作品がある。フォークナーが、最初に単行本として出版したのが詩集 *The Marble Faun*。J.C. オーツ、マーガレット・アトウッドなど現代作家も詩集を出版している。私たちが他者とのコミュニケーションのツールとして使用する「ことば」は “sense and sound” から成り立っている。意味だけでなく音が大きな機能、効果を有する「ことば」を素材として表現する作家たちは、ことばの意味のみならず、音を最大限に駆使して創作する。

近代小説の「巨匠」ジェームズは小説、詩や戯曲のみならず広く絵画の評論をも手掛けたが、彼自身は一篇の詩も残していない。今回、「どうしてだろう」との疑問をふたたび取り上げ、ジェームズとアメリカ現代詩人とのかかわりを模索、考察した結果をお話する機会が与えられたことを感謝している。

最初に、「もし、ジェームズが詩を書いたとしたら」は、個人的「たら」話であることをお断りしておきたい。ジェームズは晩年、おそらく 1890 年代後半から、手が不自由になって、執筆に支障をきたし、口述筆記に依存することになる。*What Maisie Knew* (1897) は口述筆記された作品。不思議なことに、難渋とされるジェームズ後期の作品も声を出して読む/聞くと、活字を追うよりすこし理解が容易なことを経験した「読者」は私ひとりではないであろう。その秘密を 1890 年代以降に書かれた二、三の作品を例証に、ジェームズの「小説」のなかの「詩」を見(聞い)てみたい。

そして、とくに今回ご紹介したいのは個人的「発見」——日本(京都)とかかわりの深いアメリカ詩人シド・コールマン (Sid Corman, 1924-2004) が、グレイス・ノートン宛ジェイムズの手紙 (July 28, 1883) を “No Consolation” と題した短詩に書き換えた詩作品である。日本文化に精通したアメリカ詩人といえ、ゲリー・スナイダーの知名度は高いが、詩人シド・コールマンの詩の魅力にふれる機会となったこともうれしい収穫の一つである。